25 生まれたての赤んぼのわたしをかかえ、女手一つで魚屋をやらなければならなかった母は、どんなに苦労したかしれません。
26 ゴムの前かけをしめ、長ぐつをはいて、うろこのはりついたうでで、てきぱきと魚を切る母、その背中でのけぞって泣いていたわたし、そんなすがたを想像すると、今でもきゅんとむねがいたくなります。

文図・語彙・文法

25

生まれたての赤んぼのわたしをかかえ、
女手一つで魚屋をやらなければならなかった

母は、 どんなに 苦労したかしれません。

たて
・・・・・

3（接尾）

(1) 動詞の連用形に付いて、その動作が終わったばかりの意を表す。…したばかり。

・ 焼き―のいも
・ 出来―のほやほや
→たて

(2) 助数詞。勝負に続けざまに負けた数を数えるのに用いる。連敗。

・ 三―を食う

かかえる　かかくる 【抱える】（動ア下一）文ハ下二 かか・ふ

(1) 物を腕で囲むようにして胸にだいたり、脇の下にはさんだりして持つ。「大きな箱を両手で―・えている」「書類を小脇に―・える」

(2) 人を雇って家族や会社の一員とする。召しかかえる。

「庭師を―・える」「大勢の店員を―・えている大店」

(3) 自分の負担となるような人を家族の一員としてもつ。

「両親と五人の子供を―・えて、生活に追われる」「病人を―・えている」

(4) 処理・解決しなければならないことをもつ。

「巨額の借金を―・えて経営が行きづまる」「難問を―・えている」

後略

＊子どもたちには、わかりにくいかもしれない。

おんなで【女手】

(1) 女の手。非力や、か弱さを表す語。

「夫を失い―一つで子供を育てる」

(2) 女の働き手。「―が足りない」

後略

＊　これも今では、ジェンダーフリーにひっかかるのだろうか。

やる【▽遣る】〔動ラ五（四）〕

1 そこへ行かせる。さしむける。送り届ける。「子供を大学へ―・る」「使いを―・る」「手紙を―・る」

● 書かれているなかみ（映像・感情・説明）

夫が出征し、女手一つで子どもを育て、家業を続けている母の苦労が忍ばれる。が、「てきぱきと」にあるように、母の愚痴や嘆きはない。かなりの覚悟で生きている母。そのことを思いえがくわたし。わたしの母に対する感謝や尊敬の念も伝わってくる。

T　ちょっとややこしい文になっています。整理してみよう。最後（述語）に書いてあるのは？

C　苦労したかしれません。

C　どんなに苦労したかしれません。

T　そうですね。この書き方、似たようなのが前にもあったよ。「か」で止めて、「どんなに苦労したことか」とすると？

C　お父さんが、わたしができたとき、「父がどんなにがっかりしたことか」というのがある。

T　そうだね。だから、その文も、「どんなにがっかりしたことかしれません」にしても、同じだ。

つまり、「どんなに苦労したかしれません」ということ？

C　ものすごく苦労した

C　とても苦労した

T　うん、ただの苦労じゃない。その苦労したのはだれ？

C　母

T　母は、（どんなに）苦労したかしれません、という文だ。

その苦労のなかみが書いてある。母をくわしくしているよ。

C　生まれたての赤ん坊のわたしをかかえ、

C　女手一つで魚屋をやらなければならなかった

T　生まれたての赤んぼうとは？

C　わたしのこと

C　生まれたばかり

C　まだ、歩くこともできない

T　生まれたて、というのは、「作りたてのこはん」というように、「したばかり」ということ、生まれてすぐだということだね。そんなわたしをかかえ、となっている。「かかえる」ってわかる？

C　手で、こうやって持つ

T　うん、普通はそういうふうに使う。じゃあ、赤んぼうをお母さんは、そうやってもっているの？

C　ちがう。おんぶしている。

T　もっているということではない。じゃあ、どういうことだろう。

・うちは、病気のおじいさんをかかえている。

などという使い方をする。どう？

C　おじいさんがいる。

T　いるだけなのかなあ。

C　病気だから、世話とかしないといけない。

２ 漕ぐいだり、走らせたりして進める。「車を―・る」
３ そちらへ向ける。「目を―・る」
４ 目下の者や動物などに与える。くれる。「褒美を―・る」「鳥にえさを―・る」
５ 心配などをまぎらすようにする。はらす。「酒に憂さを―・る」「思いを―・る」
６ 何かをすることを、広く、または漠然という。する。行う。営む。「宿題を―・る」「今度の舞台で大星由良之介を―・る」「民宿を―・っている」
７ 口にする。ちょっと酒などを飲む。「タバコは―・りません」「
８ どうにか生活する。「この給料では―・っていけない」
９ （俗語で）危害を加える。「かたっぱしから―・ってしまえ」
10 逃がす。

しなければならない・しなければいけない
① 義務や当然をあらわす
・明日は、八時までに学校に行かなければならない。
② 論理的な必然性をあらわす
・あっちが西なら、こっちは東でなければならない。

第一なかどめと第二なかどめの組み合わせ
＊「なかどめ」とは「中止形」のこと
読む→第一なかどめ「読み」・第二なかどめ「読んで」
重文の場合は、第一なかどめで文が結ばれる場合、ふたつの文は、独立した文として並立していることが多い。つまり、別々のことが並べたてられているということである。しかし、それがあらわすなかみ（用法）は、多岐にわたる。ここでは、いちいちを説明することはできない。
25の文は、重文とはいえないが、内容的には、そうしたものになっている。「生まれたての赤んぼうをかかえ、女手一つで魚屋をやらなければならなかった」。「赤んぼうをかかえて、魚屋をやらなければならなかった」とは、表現性がちがう。この場合は、おそらく、魚をやっていくようすを表すのではなく、「第一なかどめの形が、主体のおなじ、ふたつの状態をならべているとき、それらのあいだには、同時的な関係がなりたっている。」か「第一なかどめの形を述語にしている文が物の部分あるいは側面をめぐって、定形動詞を述語にしている文が、その、もう一つの部分あるいは側面をめぐってできごとをえがきだしているばあいもある。」ということになりそうだ。「ことばの科学　むぎ書房　参照」
いずれにしても、母の生活の苦しさを表現しているのだが、「赤んぼうをかかえて、魚屋をやる」という従属的な関係ではなく、「赤んぼうを育てるだけでも大変なのに、魚屋を一人でやっている」という大変さがあらわされる。
第一なかどめが先にあって、次に第二なかどめがある場合、がそうである。「まえかけをしめ、ながぐつをはいて」。これは、「まえかけをしめる」も「くつをはく」も「ふるまい動詞」ととらえられることができ、「第一なかどめの形が、主体のおなじ、ふたつの状態をならべているとき、それらのあいだには、同時的な関係がなりたっている。この種の使用において、第一なかどめの形がふたつの

Ｃ　病院に連れていったりもする。
Ｔ　うん、だだいる訳じゃない。うちの人にとっては、いろんな大変なことがある。お金もかかるし。そういうのを、負担がかかるというんだ。生まれたての赤んぼうの場合は？
Ｃ　ミルクをやったり、おむつを替えたり。
Ｃ　夜泣きなんかもある。
Ｔ　そうだよ。みんなもそうだったんだ。生まれたばかりの赤んぼうは、世話をするだけでもけっこう大変なんだ。放っておく訳にはいかないから、昔は、みんな、背中におんぶしていた。（挿絵参照）　ところがそれだけじゃない？
Ｃ　魚屋もやった。
Ｃ　女手一つでやった。
Ｔ　魚屋をやるというのは？
Ｃ　魚屋の仕事をすること。
Ｔ　前にも、どんなことをするか書いてあったよね。
Ｃ　魚を売ったり、さしみを作ったり、開きをほしたりした。
Ｔ　そうだ。それ以外にも、朝早く市場に行って、仕入れをするという仕事もあるし、生ものをあつかうから、仕事場をきれいにそうじをしたりする仕事もある。魚屋をやるっていうのは、そういうこと全部をやるということ。それを？
Ｃ　女手一つでやった。
Ｃ　女手一つでやらなくてはいけなかった。
Ｔ　どういうこと？
Ｃ　お父さんが戦争に行ったから、お母さんだけがやらなきゃいけない。
Ｔ　そうだね。つまり、お父さんは、わたしが生まれたばかりの時に、戦争に連れていかれてしまったんだ。残ったのは、お母さんとわたし。だから、？
Ｃ　お母さん一人でやらなくてはいけない。
Ｃ　赤んぼうもいるのに大変。
Ｔ　だからといって、仕事をやめるわけには？
Ｃ　いかない。
Ｃ　生活するためには、仕事をしないといけない。
Ｔ　そういうことだ。女手一つ、というのは、女の人だけで、という意味もあるんだけど、男手と反対で、力が弱いという意味もあるんだ。男手がいる、というときの仕事は
Ｃ　力のいる仕事
Ｔ　力仕事みたいなのは、男手っていう。女手というのは、か弱いという意味があるんだよ。
今は、ちがうかもしれないかもね。今でも、女手一つで赤んぼうを育て、仕事をしている人がいる。でも、ほとんどは、子どもを保育園に入れたりしているんだ。この時代は、普通の人は、保育園に入れることができなかったんだよ。
お父さんが、突然戦争に連れていかれて、お母さん一人になって、赤んぼうも育て、仕事もやる。つまり、さいこにかいてあったように？
Ｃ　どんなに苦労したかしれない。
Ｔ　そうだね。ただ、「とても苦労しました」とは書いてないよ。どんなに苦労したかしれない、と思ったのは？
Ｃ　わたし

T　苦労したかしれない　となっているんだから、お母さんは、自分が苦労したことを言ったのかなあ？

C　苦労したとは言っていないと思う。

C　その時の話はしたけど、苦労したとは言っていない。

T　うん。これは、わたしの想像だ。でも、この頃の話は、お母さんから聞いているんだろうね。それで、わたしは、お母さんが苦労したんだと思っているんだ。

　そのなかみの一つが、次の文にあるよ。

T　この文もややこしい。ちゃんと整理して、なかみを呼んでみよう。まず、最後に書かれているのは、？

C　むねがいたくなります。

C　きゅんと、胸が痛くなります。

T　むねが痛くなるのは、だれ？

C　わたし

T　（わたしは）むねが痛くなります、というのが中心の文だ。むねが痛くなる、というのはわかる？

C　こめんなさいという気持ち

C　悪かったなあということ

T　・わたしの嘘がもとで、友だちが知られているのを見て、むねが痛くなった。

　・ニュースで、災害にあっている人を見て、むねが痛んだ。

こういう使い方をするんだ。

C　やっぱりこめんなさいということ。

C　でも、災害はちがう。かわいそうという気持ちもある。

T　どっちにしても、心が苦しくなることだ。いろんな気持ちがあるけど、相手のことを思って、心が苦しくなることなんだ。「きゅんと」というのも、おなじこと。「むねがきゅんとする」ともいうしね。

　それが、いつのことかということ？

C　今でも

C　想像すると

T　うん、いいね。まず、今でも、という書き方からわかることは？

C　たいぶん前のことだけど、今でも

C　前にも、むねが痛くなっていたけど、今でも。

T　つまり、わたしは、もう、大人になっているということだね。そして、想像すると、と書いてある。

　「～すると」の使い方は、前にも出てきたぞ

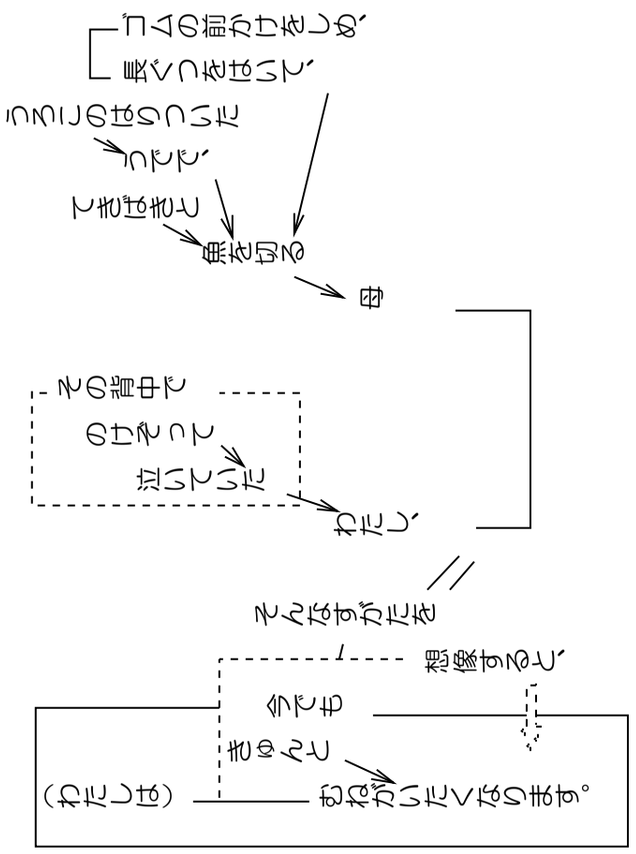
C　きっかけ

C　その時

T　普通は、きっかけだ。想像するのをきっかけにむねが痛くなるんだ。むねが痛くなる理由は、隠れたところにありそうだ。それは、後で考えてみよう。

「ふるまい状態」、なかでも「服装」と「服装」とをならべているばあいがとくに目につく。」に、あてはまるだろう。つまり、並立の関係にある。

「にほんごの文法p128～参照」



てきぱき　（副）スル

(1)すばやく手際よく事を行うさま。

「仕事を一と片付ける」

(2)言葉や態度がはっきりしているさま。はきはき。

「一（と）答える」「一（と）した態度」

のけぞる　【▷仰け反る】　（動ラ五）

(1)上半身をあおむけになるほど曲げる。反り返る。

「ドッジボールをみの球を一・ってよける」

(2)びっくりすることを俗にいう語。

「まさか冗談に思わず一・る」

そうぞう【想像】（名）スル

頭の中に思い描くこと。既知の事柄をもとにして推し量ったり、現実にはありえないことを頭の中だけで思ったりすること。
「一してたよりずっと立派だ」「一がつく」

しすると　　（既出）

きゅんと　（副）
特別な感慨や気持ちの高まりで、胸がしめつけられるような感じがするさま。「胸が一なる」

胸がが痛む
(1)ひどく心配する。心痛する。心配事などで苦しい思いをする。
「病状の悪化を考えて一・む」
(2)良心がとがめる。心に苦痛を感じる。「難民の報道に一・む」
「だました相手のことを考えると一・む」

第二ながどめのあらわすこと
　第一ながどめが、基本的に並立の関係を表すのに対し、第二ながどめは、述語の動き・状態と主従関係にあることが多い。
「ながぐつをはいて、・・・魚を切る」　「のけぞって　泣く」
第二ながどめであらわされていることが独立したものではなく、述語部分、「定形動詞の部分」のようすや状態を表すことが多くなる。とくに、「のけぞって泣く」の場合は、「のけぞって」がほとんど副詞のようなはたらきになり、泣くようすをくわしくする修飾語にようなはたらきとなっている。また、「ながぐつをはく」というような場合は、次の用法に当てはまるだろう。
「しぐさのふるまい状態を表現している、第二ながどめの動詞は、「たつ」「すわる」「しゃがむ」「ねそべる」「手をあげる」「首をかしげる」「足をなげだす」のような「ふるまい動詞」である。これらの動詞が、第二ながどめの形をとって、定形動詞とくみあわさると、しぐさが動作をおこなうときに、それに先行する「ふるまい動作」を必ずしも表現するわけではない。おおくのばあい、第二ながどめが表現しているのは、しぐさの「ふるまい状態」であって、この「ふるまい状態」の中で、定形動詞によってさしだされる主要な動作が進行するのである。・・・「ふるまい状態」と主要な動作とは、ひとつの複合をかたづくっているのだが、動作はひとつしかない。・・・「ふるまい状態」のもとに、「ふるまい動作」の結果としての「姿勢」と「服装」とを理解している。
　　・・・机の前にきちんとすわって、本を読んでいた。
　　・・・背広を着て、入ってきた。」　　（ことばの科学　参照）
　つまり、「はく」という動きが述べたいのではなく、そういう状態であることがいいたいのだ。そこに、「まえかけをしめ」が同等の立場でかかわる。両者が、魚を切る母の姿（状態）をくわしくしているのである。
　＊第二ながどめのあらわすなかみは、第一ながどめに比べると、はるかに多いので、注意が必要になる。

　　想像するんだ。何を？
C　そんなすがたを
T　うん。そんな姿が、二つあるんだよ。だれの姿？
C　母とわたし
T　母とわたしのすがたが書いてある。まず、母のほうから母はどうだって？
C　ゴムの前かけをしめ、長ぐつをはいて、うろこのはりついたうでで、てきぱきと魚を切る母
T　長いねえ。ながみがいろいろありそうだ。まず、お母さんの格好は？
C　ゴムのまえかけをしめている
C　ながぐつをはいている
T　それが、お母さんの格好だ。みんなのお母さんとは、ちがうね。前掛けってわかる？
C　エプロン
T　今なら、エプロンだ。でも、かわいらしいエプロンじゃない。ゴムのだ。そして、長靴。わかることは？
C　魚屋さんは、魚を切ったりするからよごれる。
C　水を使うからゴムや長靴じゃないといけない。
C　スーパーの鮮魚売り場のところで見たことある。
T　今でも、魚をあつかうような仕事をする人は、同じような格好をして、仕事をしているんだ。仕事の格好だ。
　　そして、何をしている母かということ？
C　魚を切る母
T　魚を切っているようすがくわしく書いてある
C　てきぱきと
C　うろこのついたうでで
T　てきぱきとからわかることは？
C　さっさとやっている
C　仕事が速い
C　だらだらしていない
C　はりきってやっているような感じがする
T　そう、いやいややっているんじゃない。どんどんと早く仕事をやっているんだ。
　　そして、うろこのついたうでで切っている。うでで魚を切るの？
C　ほうちょうで切る。
C　うろこのついたうでで、庖丁で切る。
T　ということは、うろこのついたうでで、というのもお母さんのようすみたいだね。「半そでで運動する」というのと同じかな。で、うろこのついたうでで、ということからわかることない？
C　魚のうろこがうでについている
C　魚を切っているときにうろこがうでについた
C　うでがでているんだ。
T　そういうことだ。でも、それだけじゃない。（「じんぎつね」の兵十にも同じようなすがたがあったんだけどなあ）みんなのお母さんとかだったら、うでにうろこがついたりなんかしたら、どう？
C　たぶん、すぐにとると思う。

ＣＣ　気持ち悪いって、すぐに洗う。
ＴＣ　たぶん、そうだね。でも、わたしの母はちがうみたいだよ。
ＣＣ　そんなことを、気にしていない。
ＣＣ　魚屋だから、そんなことはあたりまえで、気にしない。
ＣＣ　気持ち悪いとか思わない。
ＴＣ　そうだよね。これが、仕事なんだ。気にしちゃいられない。気にしてたら、てきぱきと魚を切ることもできない。いっしょうけんめい働いているお母さんのすがただ。ちゃんと、頭に浮かぶかな。
そして、わたし。
ＣＣ　その背中でのけぞって泣いていたわたし、
ＴＣ　これも、ちょっとややこしいね。まずわたしは、どこにいるの？
ＣＣ　その背中
ＣＣ　仕事をしているお母さんの背中
ＣＣ　おんぶされている
ＴＣ　わたしは、お母さんの背中におんぶされているんだ。お母さんは、わたしをおんぶして、仕事をしていたんだね。
　そして、そこでわたしはどうしていたかというと？
ＣＣ　泣いていた
ＣＣ　のけぞって泣いていた
ＴＣ　のけぞるって、わかる？　やってごらん
ＣＣ　（それぞれやる）
ＴＣ　そうそう、そうやって
ＣＣ　泣いていた
ＴＣ　さし絵に描いてあるね。お母さんにおんぶされて、頭を後ろにそらして泣いていたんだ。赤んぼうって、よく泣くものね。
　ふつうだったら、赤んぼうが泣いたらどうする？
ＣＣ　よしよしとかしてやる
ＣＣ　あやしてやる
ＴＣ　普通なら、そうする。でも、お母さんは
ＣＣ　仕事があるから、そのまま仕事をしたんだ。
ＣＣ　泣いてても、ほったらかし
ＴＣ　うーん。本当は、よしよしとかしてやりたかったんだろうけどね。仕事をやめるわけにはいかない。でも、ほったらかしにしているわけでもないよ。おんぶしているんだから。仕事を休まないで、できることしたら、どんなことだと思う？
ＣＣ　よしよしとか言ってやる
ＣＣ　背中をゆすってやる
ＴＣ　うん、仕事をしていても、よしよしとかは言えるし、身体をちょっと揺らして、あやすことはできたかもしれないね。でも、だっことかはできないんだ。でも、赤ちゃんは、そんなことはわからないから
ＣＣ　泣く
ＴＣ　それが赤ちゃん。つまり、わたしだったんだね。
そういう話を、わたしは？
ＣＣ　お母さんから、聞いていた。
ＴＣ　たぶん、そういう思い出話をお母さんから何度も聞いていたんだろうね。そこで、わたしが、その時のことを

C　想像した。
T　想像すると？
C　むねが痛くなった。
T　さあ、そうすると、むねが痛くなると言うのは、心が苦しいというだけではなさそうだよ。ちゃんと、何かがある。
・　お母さん、ありがとうっていう気持ち。
・　苦労して育ててくれて、ありがとうっていう気持ち。
T　ごめんなさい、というよりも、ありがとうっていう気持ちになるんだ。その時のことを想像すると、お母さんもしんどかっただろうなあ、でも、わたしのことをちゃんと愛してくれてたんだなあとか、お父さんがいなくなって辛かっただろうなと思ったんだろうね。そんな気持ちがいっぱいになって、むねがきゅんといたくなったんだよ。
　さあ、ちゃんと、気持ちも読めたかな。
T　ほかに、わかることある？